



美濃奇観

三浦千春著
上

ル 4
3132
1



ル 4
3132
1-2

ル
3132
巻 1

島田藏書

三浦千春著
池田崇廣畫

美濃奇観

明治十三年一月刊行

美濃奇観

新島放翁
氏印
華二月

美濃奇観序

も〜ぬ。美濃乃國也。昔〜はあま〜り
多かりき。海と和く通る〜りは。い〜ぬ
か〜心多〜り〜。島⁺嶺^{ニホ}の〜は〜ゆ〜す
也。〜〜〜平〜〜。田〜〜〜
りぬ。葉も〜も〜つ〜。さ〜人〜
泉〜。か〜の〜は〜。ち〜乃

美濃奇観

序

3132
卷 1

三浦千春著
池田崇廣畫

美濃奇観

明治十三年一月刊行

島田
藏書

新島
藏書
明治
十三年
一月

員法奇観序

員法奇観乃國也。昔一やまもとい
るがごとく。海とわく痛きうらむを。いふゆゑ
かゝ心多うらむ。島^十境^三のそとに水とていふ
地をいつくし平らうらむ。田をこ廣く出さ
りぬ。業もさかたつら。さかすま。人さかす
泉さかす。かゝるのりや路をいふ。ちりさむ乃

美濃奇観

序

326

さいしんあまの字。しんごう。春を字にしす乃誌
 了とつまをさうら。秋を不破の雲屋了とつま
 あま月と。もそひるふ風^{ミヤビ}流^フ士^シあまねぬぬが。
 そのら飛もぬ。三浦の春あ。この帖を
 えらむ色けに。おの秋を。乃秋。

伊^イ筆^{ヒツ}了とつまをさうら。所とらるる。岐阜の里よ
 屋^{ウチ}とつまをさうら。おまあふ霧川乃たが秋

伊

伊^イ筆^{ヒツ}了とつまをさうら。所とらるる。岐阜の里よ
 屋^{ウチ}とつまをさうら。おまあふ霧川乃たが秋
 伊^イ筆^{ヒツ}了とつまをさうら。所とらるる。岐阜の里よ
 屋^{ウチ}とつまをさうら。おまあふ霧川乃たが秋
 伊^イ筆^{ヒツ}了とつまをさうら。所とらるる。岐阜の里よ
 屋^{ウチ}とつまをさうら。おまあふ霧川乃たが秋
 伊^イ筆^{ヒツ}了とつまをさうら。所とらるる。岐阜の里よ
 屋^{ウチ}とつまをさうら。おまあふ霧川乃たが秋

いづちの世はしむるにまはらぬ。あけの世に
病も癒えてゐるにまはらぬ。あけの世に
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけ。

いづちの世はしむるにまはらぬ。あけの世に
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。

明治十三年四月 近藤昔女繪

我が美濃の國は、あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。
あけの世にまはらぬ。あけの世にまはらぬ。

書に... 浦子春の君事... 二所... 一巻... 一

... 國人... 偏... 度山... 長... 申... 序二

いづれにや可入の世に

片岡の心

明治十一年五月 柏岡静夫

片岡の心子書

破五季暗色を其體に身之清く
 怪月痕は能將整ふ事字
 新況赤染雨の生に韻流
 種所列隊十餘被圍得去
 負の海也漢新の浪富閑

蘇我多利思小孤子道智乃

酒不歸不歸又江波灘在く人守

唱是赤衣親河史舟去炬光

香水白留江波衣系蘭

長良川親鳥ら心を動海不
代歌詞より尚那長良河

水在續



觀卷上

鶉飼 長良川

美濃 三浦千春著

美濃國長良川を以て其れ福葉山ハ林麓と云ふ川あり
古、福葉川といふ也 末の福葉山の條 下見合をなす 水源ハ同國郡と郡
より出て郡上川といひ武儀郡より藍見川といひ支より
下と長良川と唱ふまうく々墨原川といふ也此川
點多く名物うく諸國に冠たり點多き平秋の末
つて河瀬の石れ河より水もつりて後つていふて

。美濃 奇觀

一

同に... ぬれあつりしれまゝ水に流して海まで
卵のまゝに流れて海にまじりぬれつゝひめてのひつゞきをこぼれ
 人よりこぼれたまはりにまじりて海にまじりつゞき又ふる點に
 くらやぬこひかしてまじり
 今年立春後二十日ほどに... 成
 長して長一寸雨まりれの川に流れて初めかいて四月
 乃央ナカハ長三寸ほどより丈とて夏の向流までに大つと秋のまゝ
 五尺ほどに膨れ大なりく其長を夫小乃一物ありノス 鰻魚を
 多みく腹に満たれを味殊と美なりく賞まへし長良川
 かく漁人鵜飼はついで結とて...ヤカヒ 鵜養こひてまゝ
 阿つかるつゝ水に結の結入ぬ長とて待て初夏
陰曆四
 月中旬

の頃小... 鮎の喜つれ... 春秋陰曆九
 月上旬 鮎の長
 月は厭ひ暗に待て鮎と鮎一宵暗のひかりぬれぬ鮎に
 ちの鮎と登り居く釣り次なり其鵜飼乃數長良人ち七
 艘小頼人ハ小艘の鮎を釣へ鮎ち... 鵜匠人申ナカウツガヒ 鵜使
 き人ヒシド 篤工ヒシド 匠人京里鮎の袖をよき弄火銚の籠
 松明を とて... 鵜と
此内十二羽と鵜匠を人にて使ひ
 四羽と中鵜使のしはしあり
 十六羽
 繩ハ... 小と分て鵜匠れぬ持ら水に放ち入れ
 け繩とタナ 繩と... 小の時鵜匠互に聲を揚ぐ鮎とてこれハ
世俗喃喃と語と鵜匠のみ
 とこころより起る
 鵜は鮎を逐て打のつむさく水底に潜カッ

こは月つらぬゆりら〜に物乃葉た〜
つたやま〜操はまは海片も〜
鮎の大おれと三四尾呑たる時幸つけて一時に之と吐し初夏の鮎小なる時分七八尾を咽に持せ吐る
たきと〜
のねと〜
る雪上映〜
巻得〜
〜
火を〜

水底小 謡曲鵜飼に底よりゆゆう葉大ふ 鮎ハ〜
前後石左と逃中〜
入手ぬ〜
み類と捕〜
ひ走〜
移〜
かる輪〜
改草れ楸葉山乃麓〜
川に悠〜

けりつゝ... 山溪と信じて
編提^{サ、エ}... 一盡を傾く... 伏山のうら...
火の孰は... 櫻の... 明年中一條...
うゝ鶺鴒... 年に入東照... 鶺鴒... 代々の...
委しく藤川記... 又慶長十六
まに全文と引

も乃世に... 候秋日犯界來轅停
此地道遙者多云云

美濃國古蹟考云今謂鶺鴒養者
以當國為第一故聞遠國雖諸

○凡鶺鴒使... 所代... 西行亦有作... 此則阿太養... 又又梁... 彦於廬城河...
神武
神
武
御
卷
に
天
皇
欲
省
吉
野
之
地
云
云
及
縁
水
大和國
宇智郡
人ハ鶺鴒使
又雄略御卷云誘率武
廬城河ハ伊勢國



寂蓮法師

ひと
ま
あ
ま
火
入
け

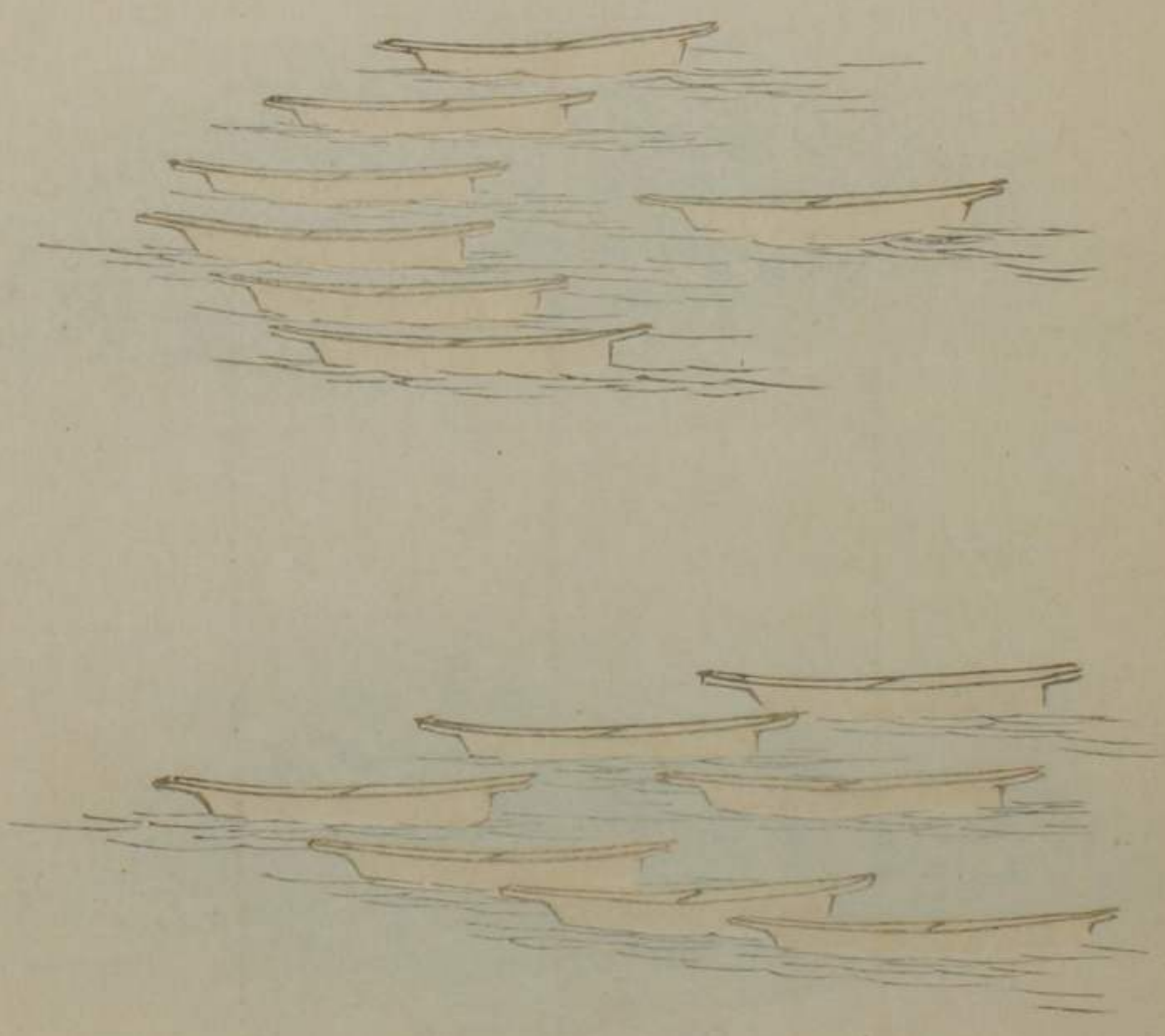
新古今

鶉^{ウカヒ}養^{カヒ}の圖

新
古今
た
り
の
形
う
と
あ
ま
あ
ま
あ
ま

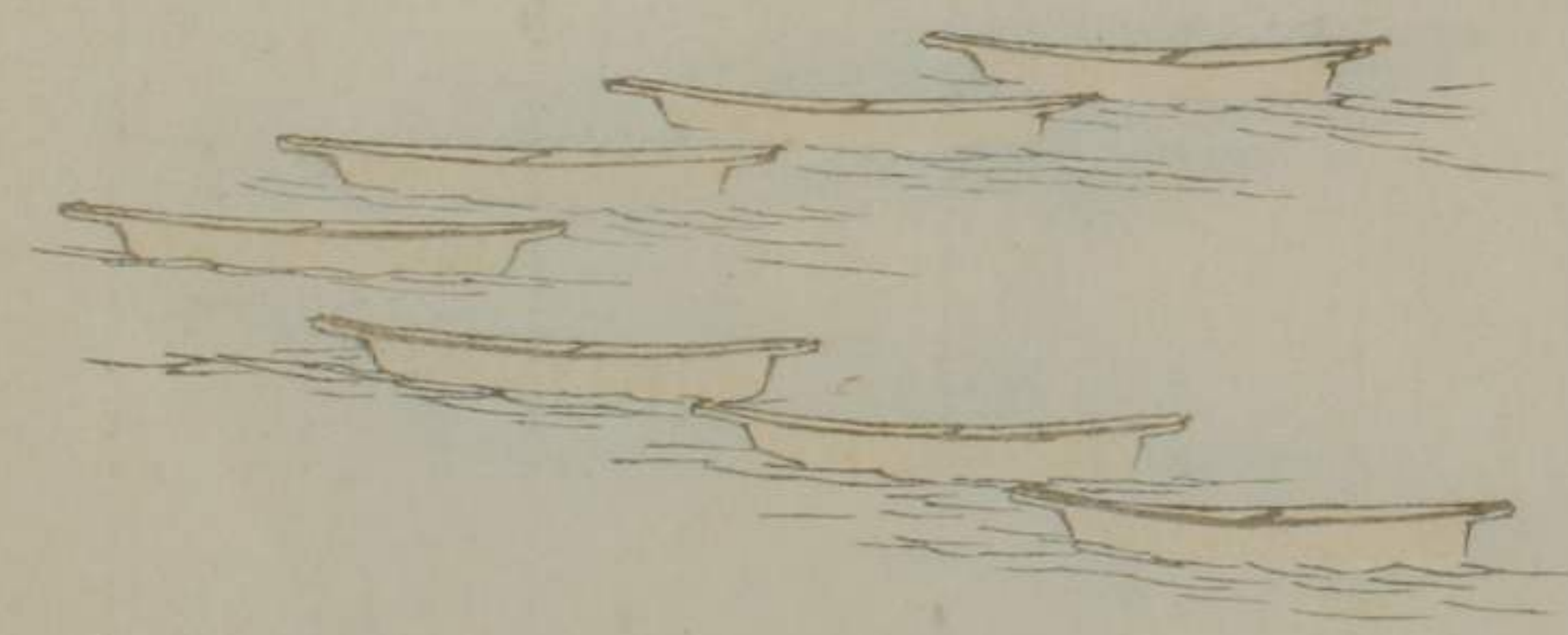


鴉船漕つれて
下も川の位置を
見せたる圖



船乃備へうさゆく
あり川の廣狭流の
緩急によせて

は圖はそれ大體を
まうとつ



○美濃奇觀

○六

鮎と吐る状



篝小松と
焼とる状



鶏を使ふ圖

手繩、鶏匠の左手に
握り持つる

手繩
こしく状



鮎吞たる鶏と
むらけけし状



箒と前へ
押出と状



箒と
手前へ
ひく状

壹志郡なりとも萬葉集乃可ハ越中國ハ辟田川賣
 比川越前國の叔羅川シクワに鶉飼とくまるとて古、新網
 乃より諸國ふつとく公に仕奉る鶉飼をりて職負
 令大膳職に雜供戸義解謂鶉飼江人網引等之類集解釋
 別記云鶉飼三十七戸やん侍中群要に諸國進鶉飼召鶉飼
 云云本朝式に鶉飼四人御厨子所別當預之りて支那の書
 少北史倭國傳曰倭國水多陸少以小環掛鷓鴣項令入水捕魚
 日得百餘頭以充食とつてハ皇國力とて侍へりてありと
 漁隱前集夷貊傳曰余官建安因事至北苑焙茶泛舟而歸

にかつた乃経るもつけさ修るなりけりいなりぬり
 と今の入寺并栲桐とよき田を程せむ可ありそをそ廢スレ
 ともる大井桂ちみつゆみりそきられさ志する幕
 府のほ官ふよ始りく萬ね事りゆりく實なる使イシヤフ
 舊轍イヤチとのもちれ變れ多くしそ今いも錢なくあり
 まらく物えれ新しを尊む古れんイナクに
 是そ復古れゆせのきふしなれとつゆれきち寺よりみ
 のもい今目前の賣景にいづ次又地ふなりそ所い直し
 うみゆきるはきまりゆり乃古ふナクに
あちとまこと
いすいすい

武藏野の露不破の雨乃月そとまに奇地よめ
 かげきつらつらゆツクナツカケノチく拙者固酒めれ徒いづり智見識コ、ロ
 あふ人愛つらへりや武藏野れ露は雨となすてお
 しく大宮所ごれ不破山小川に張れと雨の固乃カケゆり
 せなり雨きもさゆり川せの夜とらそまのゆりよれれ
 せりゆりゆきささにつけりいゆ音もほわさるいれ
 ○長良川の勢何つゆのゆりもあやめらるる長原ハルノを詳ふ
 きゆらりとも本州方縣郡に勢何ごりなる郷ありとれ古
 勢何つ徒乃位り地なるりし鶴巻郷ハ順乃和名抄り

○美濃 奇観

載り分るるはうに地名なるはくしつとくしつ此郷今ハ洞御望
 小野黒野折立古市場今川交人の八村ふつとたり松井
 八澄鶴養の郷
洞村の人云古老の夜に昔糸貫川明日焼里本巢郡中島
の古名あり
 乃北ゆく二派にうつ後一ハ今むくく一ハ東南と流れ網代川
 ことにはちやとちやこれ郷に入り三隈村折立邑
の支邑にて伊自良川と合す
 一ハ一ハ
中西郷村の古き村鑑かきしとと誌して
糸貫川の中間ふらう地なるは中島とさき 新とつうして魚と捕
 るもれはうとつ乃らとあまうりくく又鶴養乃郷の舊記
 と輯録したるものに美濃國新續風土記十一卷にややく
 延喜御時江口里に鶏匠とつうこれ住り魚ととめて献りき

れハつと賞多ひ云くと記す是ハ上乃古老の記しなり
 後の事と傳へたるはく糸貫川流かいは方より流すとたり
 くのぬうのひうとさハ木のうち便よれ川ふゆて魚と捕り
 う終小厚見郡江口里に移り住り多々なり以上ハ
澄説とつて
 今按をふと古ハ長え乃大川現今の
古川筋早田村北より近島村ふ
 らと流て尾毛村の南へ流すとあり糸貫江口尾毛なるやう
 新川の徒住りくええ方縣郡下尾毛村と鶴養にあり
 一其村乃木林嘉石衛門鶴匠の子
孫ありとつて者乃家小所藏する
 豊太閤時代古證ふととたりはらふ天文年中洪水

小て井乃口岐阜の古名乃要水樋と押ぬさ水勢溢るく地
 一派を是と井水川と云ふ其後慶長十三年又法
 水に長良れ堤決て鷺山村の方へ更小川筋ならせ
 通ふ物もなうしう後ハ此新川を古川と砂石高く
 埋めて平水ハ井水川への通す物なり是今の長
 良本川と云ふ所尻毛ありに住ハ新匠ハ天文小川瀬
 変り後漸く長良小居に遷しつゝ新又素より此地
 ありのそ其後ハ鶴養乃業と云ふなり今も今も
 たうにハ知るなり

○鶴養の家多と鶴匠とつゝ方縣郡長良村に七戸
 武儀郡小瀬村に五戸合て十二戸あり古ハ長良に十四戸小瀬に七戸あり
室永中より減して今の慶長乃ころ上世に連綿相續して
 長良川小瀬に使ハ年魚と取ると業とせし鶴匠ハ鷹匠に
 等し武家代ハ専武人遊獵の具なり永享乃ころ今
川了俊記に鶴鷹の道遙と好いと志ハ一足訓往來に為鶴鷹道遙
欲企参入候之處云云とありなりと云ハ一ハ鶴鷹とありハなる
 殊に小川乃鶴養と他に勝つれハ徳川氏乃治世の始ハ
 地尾張藩ハ所領小瀬川と云ふ其鶴匠と扶持米金と
 共へて鶴と養立る料と給ふと云ふ所とく盛大なり利

日本才一也唱つたよりの流に凡小瀬の鶺鴒養は上武儀郡
 立花村下長良村に浪に長良の鶺鴒養は上小瀬村より上
 日下江崎村まで却て川長八九里に河となつたよりの夜と
 るくくよとよりに持てるく鶺鴒と使ふは此鶺鴒養のよ
 和漢三才圖會に漁人令鶺鴒捕魚魚未下咽時推鶺鴒
 喉則自出鶺鴒常馴知之而不俟漁人手而吐魚亦妙也其
 鶺鴒使人濃州岐阜邊者至巧一舉放十四隻餘國漁人不
 相及やつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 との鶺鴒亦く馴て意のぬくはつてつてつてつてつてつて

○鶺鴒鶺鴒屋

鶺鴒屋

乃家にハ鳥屋を擇常に鶺鴒と養ひおきて冬春の向

今年今年の鮭漁終る翌年翌年の漁いづるもの
 間とつて廿間一々年の中凡三分の二なり

ハ鮭鮭鮭を喰ふも又一ナ
 月に西三夜つて河流へ移らざるは漁者に魚を捕らむに

と餌飼ふ一年中移と養ふは旁室小妙うはは飼立る鶺鴒を

常のりハ形大なり北海

本草正論に南海よりハ誤り北海に産せ鶺鴒の
 十月ころ餌と求めて南海にまゝつた時を待て

捕る小産を島移つてはは始と乃雛と捕へ来ては飼飼

て漁り馴し其鳥雌雄をて用ふくは十六七ヶ年とせ

命を保つ

近年ハ食餌の十分なつたかや
 十ヶ年の漁役に堪るも稀なり

この鶺鴒と捕らふハ

尾張の知多郡師等北南より篠海ゆく十一月下旬ころ海中乃

巖上モチ繡とつるが二羽の梅のモチ睫と総てあまると四アりて捕るあり

若し邊に捕獲する時ハ伊豆小前よりおもひとて和名

抄云鷓鴣シノトドリ大曰鷓鴣日本私記云小曰鶉志方豆止利鶉俗云具原氏乃大和本草

に和名抄の説非ありこゝにちて本邦乃人鶉と字に誤ハ誤なり鶉に

別の鳥ありしと云按これに和名抄鶉の大いふと鳥つ鳥と一説ハ當らば

とらる鶉の枕詞なり
其説冠辭考に詳なり

○若し長良川の外に鶉飼ありしと云赤保衛つ乃家集

尾張へりしに七月初日ありありと鶉飼ありしと云

て鶉飼ありしと云と云より株シノト川に鶉飼ありしと云

と云々

いづれも鶉飼ありしと云は火と水なる所の鶉飼あり

こゝに鶉飼ありし大に匡衡乃妻は匡衡正曆中尾張

権守に任し其國に鶉飼ありしと云

鶉飼ありしと云株頼川の美濃國赤坂乃驛に流あり

川ありし長良川に水脈別なり株頼川昔の流ハ大野池田西郡
より呂久川やたういふ合流

あるは分派たりたりと云は川ありしと云は今もありし大河あり

も昔ハ赤坂と株頼川の宿やついでしと云は東鑑寛喜四年の條に

於株頼川驛被施干往及浪人等云々と見え源平盛衰記の大政大臣師長公

尾張の井戸田へ下向の條に株頼川に鶉飼ありしと云は鶉飼ありし

若しこれありしと云は鶉飼ありしと云は正曆は

鶏匠手繩

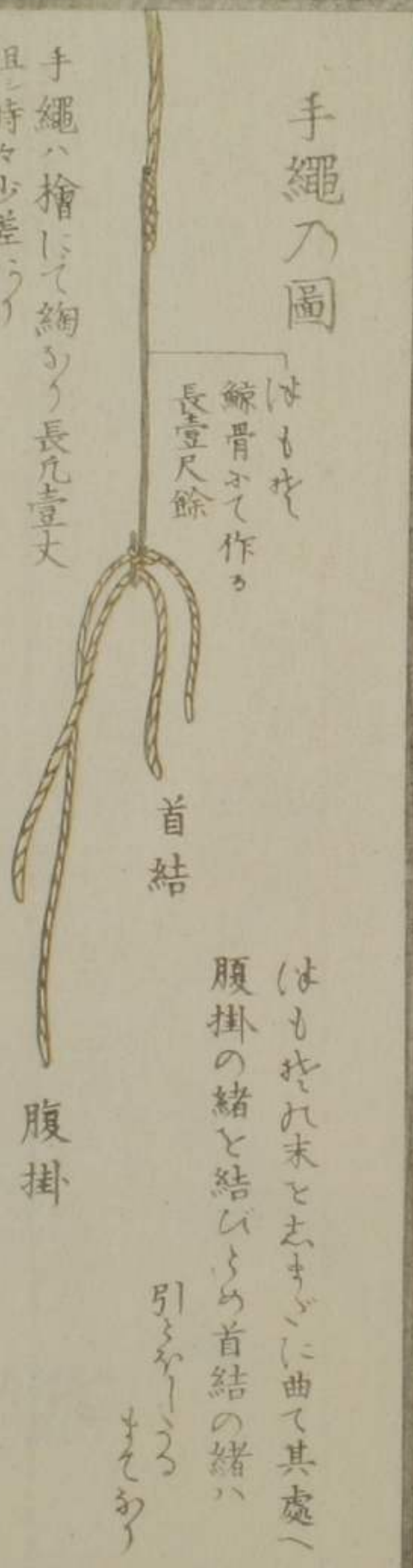
持たる圖



鶏匠ハ長三尺餘の布にて頭と包ミ前小て結ハ又胸當とふ一腰箆と穿た

吐籠 口徑壹尺三寸 深壹尺貳寸五分 此籠(鶏)の捕たる鮎と吐らるなり

手繩の圖



手繩ハ槍にて細り長九壹丈但し時々少差なり夏の初未鮎の小より長九尺に中一壹丈に一末ハ壹丈大壹尺ハも

はもや 鯨骨にて作る 長壹尺餘

はもやれ末と去まに曲て其處ハ腹掛の緒と結びより首結の緒ハ引るなり

鷓鴣の圖

鷓鴣ハ能水に潜る巧魚と捕ら捕魚漁に用るハ北海小産も島鷓鴣といふれ常の鷓鴣より大なり凡首尾の間背の長貳尺許頸長くして咽喉の中八九寸あり全身の重目ハ百五拾目其小なり



△六百五拾目以上のものを用と為さざれば魚が出来るハ頭と細き麻繩にて約吞たる鮎腹掛(下らぬ中)にたきて吐らるなり

美濃 奇観



第一圖

第二圖

漁と為んとも時前
 圖に見えたる手繩の末
 つもとに引通したる左
 絢の麻繩かて鶴の咽と
 約ると首あしとつと此と
 加減に手心ちて又此とに
 繋げたる右絢の麻繩かて
 鶴の胸と翼の下へかけて練
 と腹掛とつと両所とも脊にて
 カタコシに結ふ
 其状第一圖の如く
 腹のつとより見る形状
 第二圖の如く



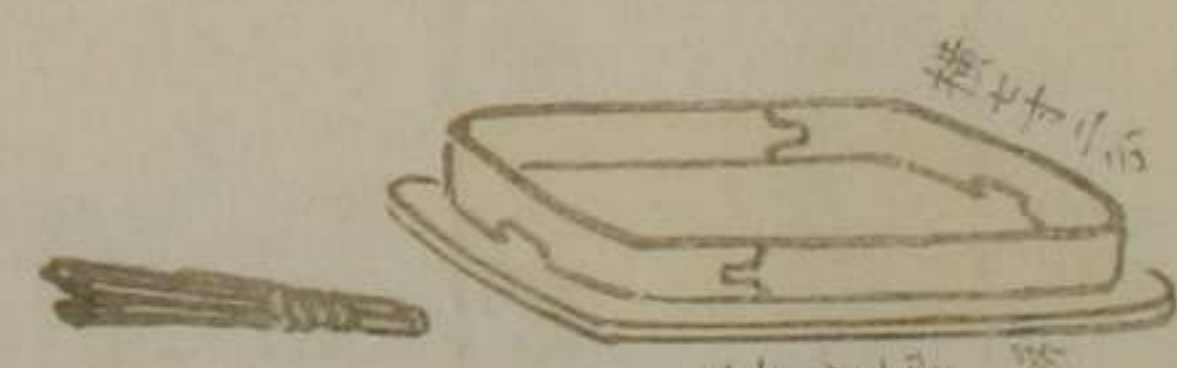
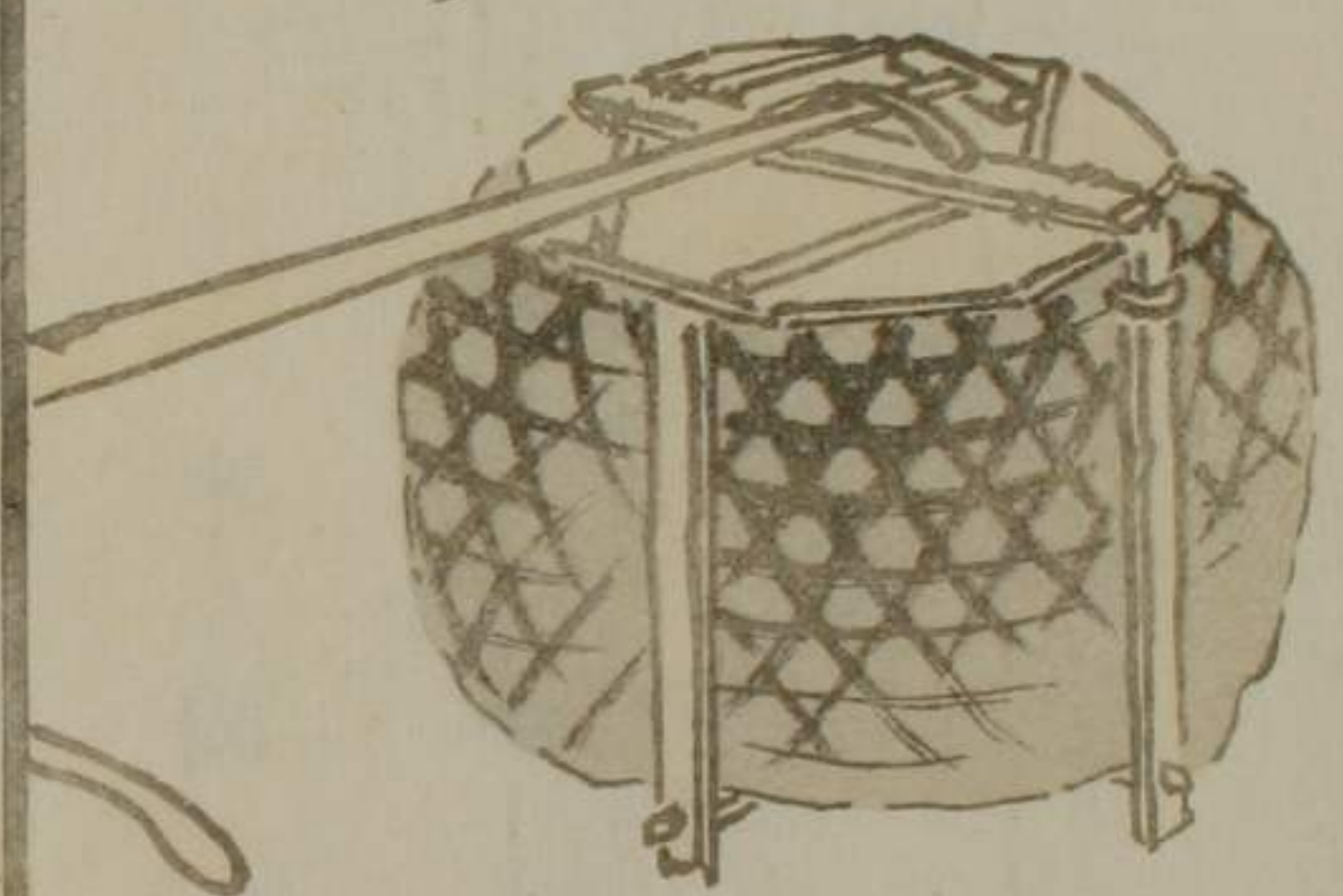
第三圖

第四圖

第三圖ハ鮎と啄て
 燕下も状
 第四圖ハ鮎と啄て
 吞か便りし
 時ハ嘴にて列
 りけくつ直
 のミ入るこ
 其状と

鶉籠之圖

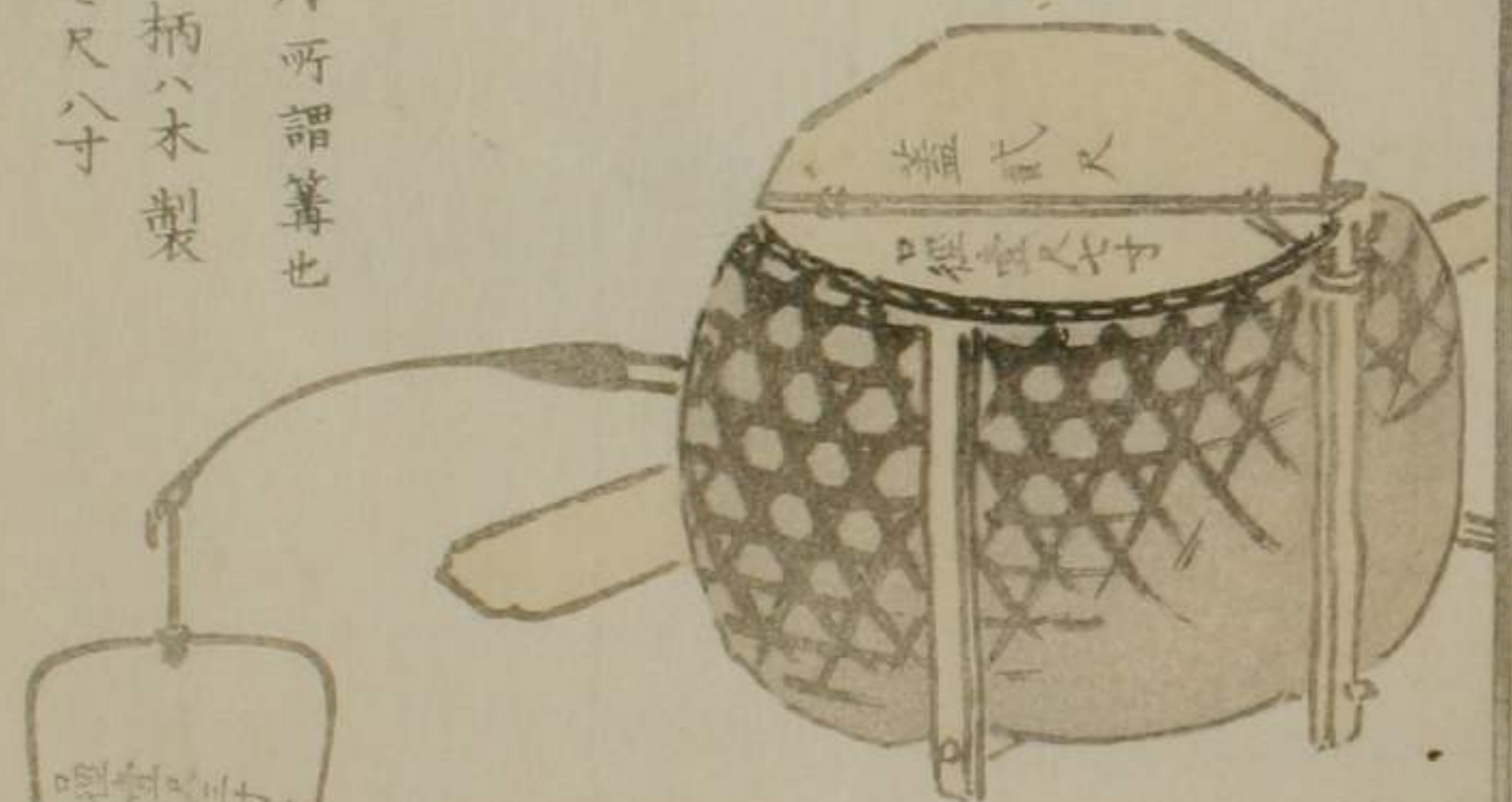
鶉と此籠に入てもちまふ
 径貳尺三寸
 深壹尺五寸
 謡曲鶉飼小
 鶉かこひひこ
 こまこまこまこ
 くれりり



諸蓋
 鮎と盛器
 深壹尺三寸
 手松明

○美濃奇觀

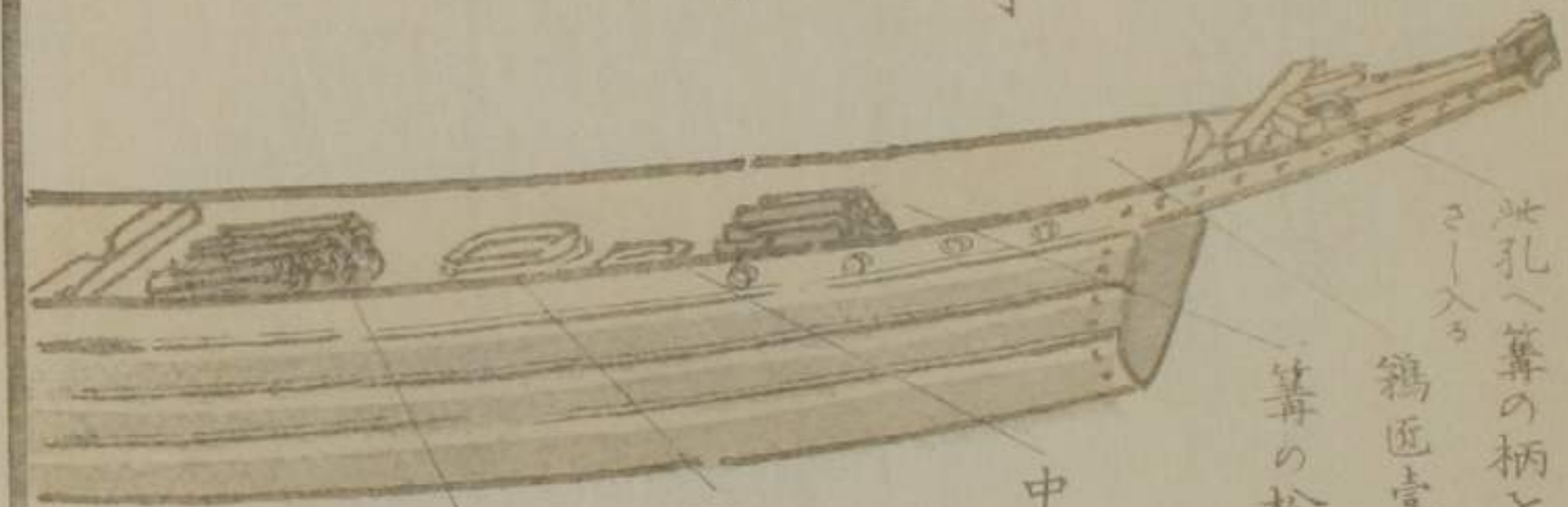
カコ タイマツ
 籠 松明 所謂篝也
 鍍製柄八木製
 柄長七尺八寸



新ハ雌松ノ
 割るる也
 深壹尺
 〇十七

鷄飼船
の圖

船身
長五間五尺五寸
中央ニテ
横三尺四寸
敷貳尺九寸六分
深壹尺六寸五分

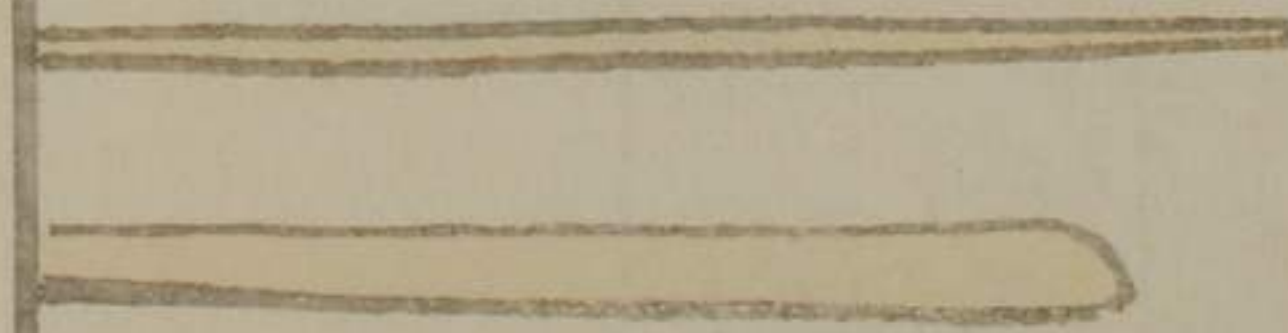


此孔へ簀の柄と
こゝへ
鷄匠壹人此所にて在て鷄と使ふ
簀の松木

中乘壹人此所にて在て棹擡と操る

鮎と盛る
諸蓋

簀の松
と積置
ふり

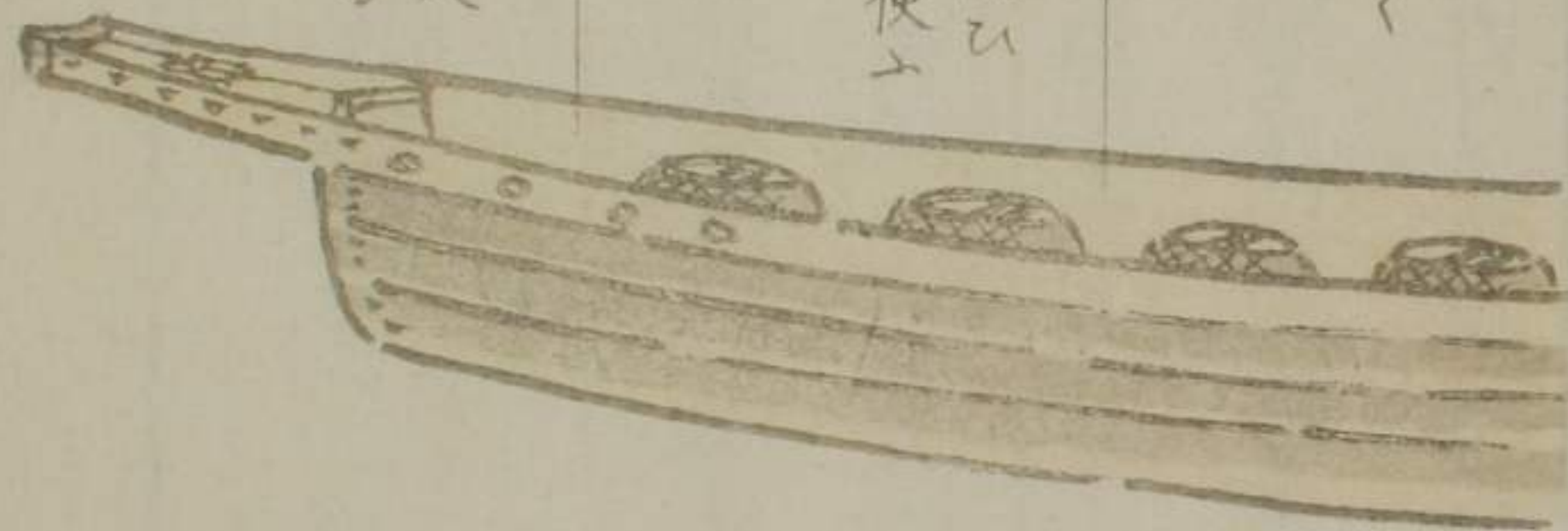


棹
木品
柁

鷄籠と並へ

此所に中鷄使ひ
壹人ありて鷄と使ふ

此所へ籠來壹人
在て棹擡と操る



擡
木品
柁

中乘用
棹
長九尺五寸
擡
長六尺三寸

籠乗用
棹
長壹丈三寸
擡
長七尺五寸

一條院乃内宇今より八百八拾餘年乃切りしあり美
 濃國乃鶺鴒のつとと證もれ不足れ又平治物語
 源頼朝都落青墓下着乃條に頼朝ト小平乃つと
 と通里たといふれう人目と修ト身なりしつと道ゆ
 りぬ谷川よけさあなせり所一可にある鶺鴒と違あり
 なるに外に情ありて人目と志の所事トと侍ト居せりた
 まに作作トつとへき所志の所へ送るゆきまトゆき
 づつとあつれまにたつとて青墓へつとやトこもおも
 とのつとせらたつとたつと美濃の青墓に到るま

乃向くつとつと川の鶺鴒なりし也

○堯孝の富士紀行九月十二日此條にもつと川ハ真多
 かの所のつとつと梨川の面つとつとつとつとつとつと
 ありて侍と舟楫つとつとつとつとつとつとつとつと
 一ありてありつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 鶺鴒舟ありし桂人カハラヒトとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

のちてそ見ゆふ物ぬりたにあら

海は鳥居よりうらまをたてて流るぬも偶にう流るぬ

たふひゆるむうききれたるものおもうけ乃うのてよふ

すあけの墨俣川スミエガハの長良川の下流のたつねをたつて流るこの紀行の永

享四年足利義教將軍富士登覽乃道の記なり永享四年

今明治十一年まで
四百四十七年なり

○兼良公乃藤川記に云江口よりつね根津國にゆく
同記よりこれ遊女おやいなるもすおにるしハたつねの
たふこつふを同く

鴉のしつねふさるぬきあはまもあはまのあはまのあはまの
十七日ゆくの見海へあはまのあはまのあはまのあはまの
しつね六艘乃船を舞たりしつねふさるぬきあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの

あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの
あはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまのあはまの

まゆらり粉のまきたる鮎とわらふく初うて賞殿とん
とわら焼中いおしりうたをい

さやあぬ夜川の鮎のわら焼うけさ見ゆめくわら
こあはは時代の鏡鳴や江は地つたう長え川と江
村の西南と伝とたきぬしりふ江とわら粉河とりあり
今れあ〜りれは流るに〜てやて見る〜

○鶉の古寺萬葉集卷一大御食に仕まつる上は
瀬に鶉川と立下つ瀬に小網サガり〜同卷十三に上つ瀬
小鶉とむつつたき下つ瀬に鶉とやはうけ上は瀬の鮎と昨

〜見下つ瀬に鮎と昨〜同卷十七に年魚トビ走る夏入



盛島は鳥鶉養う〜とさゆ〜川乃清に瀬〜に篝り
みはさいのぼる同卷十九は河の瀬小年魚トビ兒〜鳥島つ
鳥鶉うい〜さ〜わら〜あは〜いゆ〜ハ〜わら〜詠でさ〜
この長え川の粉河とよさゆ寺也代の集り〜た〜た〜心
さ〜か〜た〜ふ〜と

老の本曾越
波車川の鶉トビ乃まの〜に見をゆとね 細川幽齋
あ〜は〜星〜も〜里〜ゆ〜い〜は〜ゆ〜い〜の〜鮎〜と〜し〜と〜ら〜れ〜川〜

みの岡長え川の鶉乃繪ふ 本居宣長

鈴屋集

鶴うし舟のなはりていふう門むつはらふかたの火の軌

長良川の橋のたはらふ

岩倉具選卿

さゆきしーわふのれ川のうわひさひさすそをれあさりては

あゆみの川流とのほろ路に

千種有功卿

なう河橋のなまけり釣りしを傾けあるりゆへうけをきしに

名所鶴河

香川景樹

桂園一枝

わ耶くく移うひりきたりそえ川きくくそぬのせせす

鏡もやうしあしをたふりてわく火のうらなつて

岩れふらつてうら

大館高門

岐阜道草

わもにうぬほのうなうのうと水底のまう山り入る

長良川の橋のたはらふ

植松茂岳

家集

わつらん川きくくせふ遠りうたううはのうをいれ

本居豊頴

うささられ文のうささられ文のうささられ文のうささられ文

岐阜道の記

長良川きくけりてこれのあはれゆきぬ右に全華山

乃志中へかくいんてた切岸あまはけゆに経ふく

善少とてててて善少の力をきく備つたらるるれはなつて

産のわがなよとてててててに産のわがなよとててて

此所は小瀬と長瀬
と名づつ小瀬の
舟母のたぐひ
二十一社あり

船十と重なるに往所をなする船母のたぐひ
ゆく香晴乃りては船母のたぐひ
て人よまらぬも諸君も書けり一筆に
かつぬいふ夜乃りては船母のたぐひ
おとひさやまのたぐひにひきかき
この外にも尋ありては天保十四年九月尾浪彦乃鴉
遊覧の記あり

佐都伎の日記
鴉乃ひれ母あふひいひい一里のたぐひ
つよあつてはたのたぐひのたぐひ

人酒青なる船に持たまらぬ
つとむつとく長乃のたぐひ
上乃のたぐひを足知まはるるに山乃のたぐひ
のつとむつとく長乃のたぐひ
中乃のたぐひを足知まはるるに山乃のたぐひ
もへてはまらぬ

栗田土満

く佐まらぬ船乃なる船母のたぐひ
長乃のたぐひを足知まはるるに山乃のたぐひ
山乃のたぐひを足知まはるるに山乃のたぐひ

。美濃奇観

。二十三

一鴻津より移りてひらき居り大町に世々まばらしては
 土岐の子女の長女の川乃何水のありてはひらき居りて
 大川に候ふ所のりしついで乃移りて居り居りて見ゆ可く
 長谷川より東やちふひりて居りて居りて居りて居りて居りて
 題志すは

度會弘訓

うしおとちうとて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 ろりて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 はつと居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 瀬の站とくはりて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて

繩くやう分てねさひらき居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 ろりて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 志す居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて

○貞享のち芭蕉庵桃青波鼻にありて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 ろりて又十八樓の記ありて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて
 口に階多し居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて

十八樓記

美濃乃國なりて居りて居りて臨みく水橋ありて居りて居りて居りて居りて居りて
 こゝに伊奈波山後ありて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて

。美濃 奇観

。美濃奇観



二十六

長良川眺望の圖



稻葉山



岐昇城懷古

木下順庵

日本詩選
殘壘荒隍積水阿

運傾後主若悲何
雲雨嚴偏訝降幡下
山谷猶餘折戟多
高臺廢千間空石礎
阪回百曲翳藤蘿
晚風忽起松濤湧
絕似昔年奏凱歌

○美濃奇觀

○二十七



寺の遺跡の次田中の寺ハ枚の一むにうき居り
 下民家と作れうのみを虫と保しり布衣に
 引く右のつらぬりぬ里人の住みきりく漁村
 をあててりぬ釣たるたのつらぬにたは樓を
 もくすふ似るきやうと夏れ日をもくすも入日
 新し月つらぬはむとほりの中火のうけやち
 かりてつ桐のつらぬにたはむとふとまにたは
 なるつらぬつらぬ瀟湘のハのあつと西湖の十れ
 味のつらぬにたはむとふとまにたはむとふと
 まにたはむとふとまにたはむとふとまにたは

十八様ごもつらぬはや

まのあつとふらぬはむとふとまにたはむとふとまにたは

こハ貞享五年付夏の作るれつ又瀟湘の白ハ

西白うてをかくうねさ鶴とまねとを

まもやたふらぬはむとふとまにたはむとふとまにたは

○鮎アユノシ濃陽志略云香魚國俗用鮎ユ字ユ岐阜製鮎ユ以ユ充ユ

方物ニ送ニ為ニ岐阜名産ト 按てはに香魚本草に鮎書紀万葉に細鱗魚年

字を用ふるハ神功皇后三韓を討りハてて松浦縣ふつてま針をまけて釣
とたと我も財の國を得むと事あるとあつと川の魚釣とらへとうけはて竿とあ
けつハ年魚とらへを占つたの故
 大和本草に沙川の鱒ハ小にして

瘦大石多に大河あるは苔をくし大にいて肥とつるり
長え川は坂阜より上へ石多しこれ川筋も多し
の川乃鮎最ふり美濃明細記云長良より三里川上
を小瀬川といふ此所の鮎頭小く背大に丸故に小瀬丸と稱を
大概より鮎七八寸重百目より大なる稀ものも長
壹尺壹寸重百八九拾多ありて天正中美濃國主土岐家
あて後藤才助本業郡馬場邑の人の命して長え川の鮎に
て鮎を製らして遠くへ候に贈りしこれ坂阜鮎鮎の
鮎筋ありし其後方物として元和元年より將軍家小

獻し始りて同五年この地尾張藩の封内やありしを
其藩より坂阜に鮎所と置ありしを製りて七年
恒例として幕府へ供せしむるなりし小鮎鮎は初夏の
ころに若鮎ありて他よりより多し此鮎鮎は他より類多
名産ありて世に名を馳せしなりし也此鮎は多くて鵜の捕りし鮎にて製しを常とす
延喜式内膳式小諸國所貢年料美濃國鮎鮎隔月三缶
火干年魚一擔八籠鮎年魚四擔八壺やるえなむら鮎
乃鮎も古きものなり

鮎腸鹽アユコクノニホカラフ辛ハ俗に宇留加やうふ味つる新撰美

濃志云支那の書に鯉鯪とあるものや製方同く年
魚乃腸又子を取て鹽に藏めて四方に鬻くわうこし

○稻葉山ハも金山華山と稱を改阜れ東にありて西の
麓ハをわく市街に接たり南の尾に西にありて石垣
高く築き鎮せりは縣社伊奈波神社なり五十瓊磯
城入彦命と祭ふ境内にも櫻楓乃木朽なく春秋乃あり
更つてよき一峰を東北に修りて一峰高く聳えたりハ
古城址あり今俗に金山華山やつて神社乃ありて
を稻葉山とつて慣るややとて誤にや哉峯あり

てとす厚き福葉山一名金華山ありて新撰美濃
志にわつる二道あり一ハ七曲口一ハ百曲ハ
やつ羊腸乃坂路なりわく東北ハ長良川ハのそみ
断岸壁を立た多しやとて我々やとて要害双ハ又是
とて古木鬱々としておぼやかりて神靈乃氣
に感を得たり奇く異なる勢なる山なる峯に
登ると天守臺ありの迹ありて遠く四方よりありて
郡邑の位置山川ハ景致眼下に見えたり遠くは且
寅乃の加賀の白山寅卯乃の小信濃れ駒の嶽

嶽東濃乃惠那山と望み辰のうらに尾張乃二宮山亦牧
 山申商のうら伊勢乃多度山西に近江の伊吹山雲間に
 顯る北と長良川乃あり方縣郡乃山にうら
 遠く見す南に顧れ侍努乃海尾張の如多乃浦く
 之圃や極る所を如す減にの山地形をくして眺を
 なるにありし中古織田右府は要害を修り西征の功甚
 甚と茲に聲を竟ふ天下に亂と靜を帝室を安む
 につく不幸にの志の終る一朝職居れ
 たるに又七ひあ跡まると業と繼つて古城を

かくて僅に残る礎をく若く木葉うり埋み
 嵐にむよ松乃拜ありてまき多すれとのもれとあり
 きにまねきせれゆりきり

此福葉山乃城は建仁中二階堂山城守藤原行政始て
 之れと築く星霜を経て永祿中 信長尾張より為城に
 移りて十二年居住あり其後信忠信孝や二代は城
 小居位一信孝天正十一年柴田勝家と同時豊太閤
 亡りて之れを凌辱れ大坂のよのり信孝
 たるちほれのみとけり特はのり山のちほりゆり

こよみまれう〜天正記に記るる中平經て及信忠乃
嫡子秀信初名三法師元文祿元年豊太閤乃より
あ〜當城乃主とす〜さ〜岐阜中納言とす〜
去りぬに慶長五年石田氏に與〜關東勢の爲る
攻落すれ秀信高野山上誓居を同七年此城と毀す
加納に移すまき梨

福葉山ハ因幡國小同名れ山あり古今和歌集〜題去
らす 在原行平朝臣立口の終いなる山のさ〜むら
まの〜さ〜の〜今〜の〜さ〜あ〜の〜古〜人〜の〜

美濃れ記〜或は因幡國れ等〜
ま〜の〜さ〜の〜今〜の〜さ〜あ〜の〜古〜人〜の〜

岐阜志略云勅撰名所集類字等
宗祇の説美濃に治定とす

伊奈岐山因幡す美濃と見え井蛙抄に伊奈岐山美法
因幡両方に巧也美濃ハ福葉や書へなはこり〜
山美法と見え〜中昔〜美法乃の〜
多〜按〜伊奈岐山平朝臣れ〜伊奈岐山とす
國れ〜

て本誌にいろいろのかり

小一條殿駿河ふりみぬたるにのりていせ侍た

ふちて山といはれぬ

藤原實方朝臣

家集

ちよふふとぬる乃山をうけぬはちてつるいふのうらら

此哥と新撰美濃志にむよふとるやゆれ山は美濃の地名とて合たるとす
とて美濃國安八郡結村にむよふの津りて若く人のあはれ可なり

美濃のふふはちのむらぬにちる女れとてにまのむとつや

戸まひてたふりつるれゆらふい津守國基

家集

まのむとつやふふはちのむらぬにちる女れとてにまのむとつや

美濃のふふはちのむらぬにちる女れとてにまのむとつや

堯孝法師

家集ふの美らふいぬる乃山のむらぬあきて今めつるちるむらふ

二條良基乃小島れとていには内裏小島の行の屋も内

あつて田舎ふはきていふは山を遠くねえつるむ

都れたの美らふとていふは山を遠くねえつるむ

むらふちやあつていふは山を遠くねえつるむ

一條良基乃藤川の記に江はより船ふのむらふ二里は

とていふは山にちるれむらふいには山は麓をとていふは

け山は真州とて合はれはむらふい伊宗は社力伝記に

ちるむらふいには山は麓をとていふは

藤原實隆の濃路北行に九月廿二日雨のちけりて
 ありてつものけりてなまじしをりる家居の城郭の
 見ゆるにふゆの宿松山とていふまじしをりて
 ありてつものけりてなまじしをりる家居の城郭の
 仁和寺僧正尊海の吾妻の道記につはは山のやまや井
 のたつくる所と一日逗留し宿松山とていふまじしをりて
 なまじしをりてつものけりてなまじしをりる家居の城郭の

世乃中の人いふまじしをりてつものけりてなまじしをりる家居の城郭の
 去は天文二年の記ありて其より井れ口やつくる今れは阜
 の内東北へよれる地なり

觀岐阜城跡懷古作歌并反歌 萩原廣道

五五百櫓城田乃松ほこし利蔭れみまきし世はまは盛る
 といひ清きつらつらにのまらあさけらこまきし世はまは盛る
 百ちね美濃乃木の持ちいふまの山ふ天をまなつ城とつ
 くと國形と遠くゆきまきくおらひし事らなまじしをりて

河内小京一のぼり天皇とりのぼりまをてて天下とてんた月
ひららちのぼりいりててて長良川あつた水たあつた
お空にり又山のちきれた橋とけあつたいりてあきせし
てあつたのりてき道と切通しとてい用き谷うけつた
ゆゑ水とちきやとていゆててい谷とてい峯あつた
てとてい高殿とたあつた乃夫余とていあつた
あ代あてとていとていあつたあつたあつたあつた
と空輝れ世を帯ぬるも川の側へ敷あつたあつた
の末ちたわつた石垣に夏草とてい松うんふりててい

まはらとていあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
まはらとていあつたあつたあつたあつたあつたあつた
たつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
たつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
○福葉川昔は長良川と福葉川とていあつたあつたあつた
なつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
なつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
とてい大河あり雨とてい水つたあつたあつたあつたあつた

川辺にも山人の家乃天井と修く作置板敷の中より
きて水也れ時ち其上にのちもぬふとも炊くありとせ
りえ又伊奈波神社縁起に載るる明神の難行法所
りて好ひし哥

此縁起延文四年九月正四位
下卜部宿禰兼前の奥書あり

伊奈波門底より次玉の石我しとて油のぬれを

○船伏山鏡岩あやつし所これの川をいれりありて船

にふみ合せり波舟遠まはさるる浪岩の
舟もてふ舟初めりまゝ尾徳橋に長

村おつきたる尾徳村の南のうゝ長衣川に架りきた
よ今いたる事と世にあらはれ長衣の松橋をのけて

長衣川と紅乃に橋をりたりとありて
所のうゝ乃松をうもをせり

衣笠内大臣

夫木抄のりそまにひしつりつるも磨れよこの橋を造りし

一條兼良公

藤川記
たのむこれあつたきれたりきのとて力く

美濃奇觀卷上 終



